

ヘブライ語聖書における捕囚と穢れのメタファー※

大 澤 香

Metaphors between Exile and Impurity in the Hebrew Bible

OZAWA Kaori

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 専任講師
連絡先：大澤 香 ozawa@mail.kobe-c.ac.jp

※本稿は、2019年12月8日同志社大学にて開催された「若手研究者による古代中近東研究会」で行った研究発表に加筆修正したものである。本研究は、JSPS 科研費 JP19K12963の助成を受けたものである。

要 旨

捕囚後の第二神殿時代における「異邦人の穢れ」概念の形成は、古代イスラエルのアイデンティティの確立と深く関連していたことが考えられる。本稿では、古代イスラエルにおける「穢れ」概念の変遷を跡付け、捕囚後のユダヤ教において「穢れ」概念が民族の境界付けのために用いられたことと、捕囚の出来事との関係を、メタファーの性質に着目しつつ明らかにすることを試みる。捕囚の文脈において、イスラエルの道徳的穢れが、聖所から一時的に遠ざけられる儀礼的穢れの状態にある女性のメタファーによって表現され、更にこの「穢れ」概念が、捕囚後のイスラエルの民族的共同体において、穢れから自らを遠ざけ「聖なる民」となることへの動機付けとして作用した経緯を考察する。この「穢れ」概念は、「聖なる種族」としての民族の境界付けの方向性と共に、やがて「異邦人の穢れ」概念の形成につながっていったことが考えられる。

キーワード：アイデンティティ、穢れ、捕囚

Abstract

It could be assumed that the notion of *the impurities of the Gentiles*, conceived during the second temple period after the exile, had relevance to the establishment of ancient Israel's identity. This study pursues the transition of the concept of *impurity* in ancient Israel and clarifies the connection between the situation where the concept of impurity was used to draw an ethnic border and the occurrence of the exile from the perspective of metaphor. It reveals that in the exilic context, Israel's moral impurity was depicted by the metaphor of a woman of ritual impurity who had to be kept at a distance from the sancta in the meantime, and that the *impurity* served as motivation for Israel's ethnic community to become *holy people* after the exile, consecrating themselves away from impurity. This concept of impurity is thought to have created an ethnic border, leading to the formation of Israel as a *holy seed*, and the origin of *the impurities of the Gentiles*.

Keywords: identity, impurity, exile

はじめに

第二神殿時代ユダヤ教の分派の一つとして生まれたキリスト教は、やがてユダヤ民族以外の異邦人を包含し、異邦人を主体とする宗教として自らのアイデンティティを確立していった。ユダヤ教からの分岐点とも言える「異邦人の受容」は、キリスト教のアイデンティティの根幹に関わる要素である。ガラテヤ書2章15節でパウロは「私たちは生来のユダヤ人であり、異邦人出自の罪人ではない」と言う。他にも新約聖書の複数の箇所から、異邦人が罪人とされていた思想的、社会的状況が窺われる¹⁾。異邦人を罪人とする視点は、捕囚後の第二神殿時代の形成が想定される「異邦人の穢れ」概念と関連していると考えられる。「異邦人の穢れ」概念の形成は、古代イスラエルのアイデンティティの確立と密接に結びついていた可能性がある²⁾。

本研究は、捕囚後のユダヤ教において「異邦人の穢れ」概念が形成される前段階について考察する。古代イスラエルの「穢れ」概念が民族の境界付けのために用いられる際、捕囚の出来事がいかなる影響を与えたのかについて、メタファーの性質に着目しながら考察する。

1. 「穢れ」の概念

1.1 「穢れ」の分類

ヘブライ語聖書における「聖」と「穢れ」の概念の重要性については、これまでに多くの議論がなされてきた³⁾。特にヘブライ語聖書の穢れを「儀礼的穢れ」と「道徳的穢れ」に分類しつつ論じた J. Klawans の研究は、その後の議論に大きな影響を与えた。Klawans は、儀礼的穢れと道徳的穢れの五つの重要な違いとして、①儀礼的穢れは罪深さとは一般的に無関係であるのに対し、道徳的穢れは重大な罪の直接的結果である点、②儀礼的穢れがしばしば感染性の穢れを生じさせるのに対し、道徳的穢れに伴う接触感染は無い点、③儀礼的穢れは非永続的な穢れを生じさせるのに対し、道徳的穢れは、罪人の、そして結果としてイスラエルの土地の、永続的ではないにしても長期に渡る降格をもたらす点、④儀礼的穢れが清めの儀式によって改善され得るのに対し、道徳的穢れは清めの儀式の対象ではなく、罰や贖い、そしてまず第一に道徳的に穢れた行いを断つことによって改善される点、⑤用語上の相違点、を指摘する⁴⁾。

Klawans の分類に対して、C. Nihan は、「道徳的穢れ」においても儀礼的側面は同様に重要であるために用語法の問題があるとし、穢れの「原因」による分類として「物質的（あるいは

1) マコ 2:17 並行; ルカ 24:7; ヨハ 9:16 等を参照。本稿における聖書のテキスト名の略記は、『聖書 聖書協会共同訳』（2018）に準ずる。本文中の聖書の訳は筆者によるものである。

2) ユダヤ教にとって「穢れ」と結び付く異邦人へ門戸を開いたと言えるキリスト教であるが、例えば一テサ 4:5-7 でのパウロの言葉に見られるように、キリスト教もまた自らのアイデンティティ形成において、古代イスラエルの「聖」と「穢れ」の概念を受容している可能性がある。この点に関する詳細な考察は別の機会に行う。

3) M. Douglas とその後の議論について、大宮「初期ユダヤ研究における清めと汚れ」139-148頁に詳しい。

4) Klawans, *Impurity and Sin*, 26.

生物学的) 穢れ」と「道徳的穢れ」を提案する⁵⁾。そして Klawans の分類が、レビ記における穢れの、二つの区別されたシステムとして想定されていることについて、体系的分析を提供する点では評価しつつも、「道徳的穢れ」と「儀礼的／物質的穢れ」が実際に重なることなく区別され得ると想定することは、いくつかの重要な問題を生じさせると述べる⁶⁾。Nihan は Klawans の分類の主要な争点として、道徳的穢れが儀礼的清めを条件とすることはないと想定を挙げ、この想定が明らかに、レビ記16章に矛盾すると指摘する⁷⁾。儀礼的／物質的穢れと道徳的穢れの間には、テキストにおいて既にその意味範疇の重なりが確認される。

1.2 「穢れ」とメタファー

「穢れ」とメタファーとの関連については賛否両論があるが⁸⁾、少なくとも「穢れ」概念のルーツを遡って考察する場合、それはメタファーと無関係ではあり得ないだろう。

M. Guichard と L. Marti は、衛生学的な意味での「汚れ」が必ずしも宗教的な意味における「穢れ」に分類されるわけではないことの自明性を指摘するが⁹⁾、その報告からは「穢れ」の原初的イメージとメタファーとの密接な関連をも窺うことができる。Guichard と Marti は、古代メソポタミアの文献から、表面的穢れと人間の奥深くに根付く穢れの二種類の穢れを確認することができるとし、表面的穢れは外部の接触によってもたらされる「精神的レベルにおける」染みのようなもので、そこには日々の汚れの反響があると指摘する。すなわち、「穢れ」のイメージは、日常の中の衛生学的な意味での汚れのイメージをメタファーとして用いているということである¹⁰⁾。より根深い穢れについては、その清めのために、より複雑な方法が必要とされることが報告される¹¹⁾。

5) Nihan, “Forms and Functions,” 321.

6) Nihan, “Forms and Functions,” 344. その例として、レビ記11章に記されている意識的な違反が、レビ記12-15章の物質的穢れの一つと同じ結果を引き起こすことが挙げられる。

7) Nihan はレビ16:16で言及される「穢れ (טמאת)」と「違反 (פשעים)」について、理論的に「穢れ (טמאת)」はレビ記12-15章に記されている物質的穢れを指しており (cf. レビ15:31)、「違反 (פשעים)」はその神の法への意識的違反を指しているとし、この両者が「彼ら (イスラエル) の全ての罪 (כל־חטאתם)」を形成しており、それが聖所を穢すと認識されている点を指摘する (Nihan, “Forms and Functions,” 344-345)。

8) J. Neusner は聖と穢れが道徳的・宗教的行為にとってメタファーとして作用することを指摘する (Neusner, *The Idea of Purity*, 108)。それに対し Klawans は、罪による穢れを単にメタファーあるいは一つの象徴的体系の一部として見ることに異議を唱える (Klawans, *Impurity and Sin*, 11, 32-38)。注36をも参照。

9) Guichard and Marti, “Purity in Ancient Mesopotamia,” 48.

10) 人が誰かに紹介される前に礼儀作法として身を清めることと、礼拝や祈りの前に適切な儀礼を通して穢れからの清めを行うことの類似性が指摘されている (Guichard and Marti, “Purity in Ancient Mesopotamia,” 80)。占いで神々に尋ねる前に、口と手を洗う古バビロニアの占者の例が挙げられている (Guichard and Marti, “Purity in Ancient Mesopotamia,” 81)。

11) 例えばアッカド語で記された *Šumma ālu* のテキストは、神殿に入ろうとする人の清浄のレベルを記しており、その場合の「穢れ」とは、その人が神的存在と接触することが可能かどうかを述べる手段である、と述べられている。人がもしここで「穢れ」と規定されている状態にあることを知りながら神殿に入る場合、その人は神の怒りを引き起こさずにはおかない深刻な穢れを負う、と指摘される (Guichard and Marti, “Purity in Ancient Mesopotamia,” 83-84)。

1.3 人間の「穢れ」

古代メソポタミアの概念では、個々人はそれぞれの個人的神と繋がっており、その神がその個人を守り、他の神々との間を仲介していると認識されていた。そして「穢れ」あるいは「罪」は、その神を怒らせ、その神がその人を離れることを引き起こし、結果、自然あるいは超自然的攻撃からその人を守るものが無くなる事態として認識されていた。何らかの徴候があると、その人が無意識のうちに穢れの状態になっているのかどうかを見極めるための探求的措置が行われた¹²⁾。

古代オリエントにおける清浄と穢れの概念を定義することは、清浄についての法体系が残されていないが故に困難としつつ、Guichard と Marti は古代メソポタミアの「穢れ」概念について重要な点を指摘している。それは人間が存在する以前の世界について記述したシュメール人には、人間の活動が存在しないことが、穢れが存在しないことであるとの認識があったのではないかと指摘する。神々のために労働をする人間という組織は、世界に命とともに必然的に穢れをもたらしたのであり、「存在」が「非存在」という清浄の「傷」であると言われる¹³⁾。「清浄は神的世界の特権であり、人間は生来的に、穢れによって特徴付けられた領域に生きる者」であり、「神々が人間に、様々な儀礼を通して穢れから身を守り、世界の中でバランスを維持する手段を与え」ているとの認識であったと考えられる¹⁴⁾。

2. ヘブライ語聖書における「穢れ」概念の展開

2.1 「清浄」と「穢れ」概念の伝統

レビ記11-15章に記されている穢れのシステムを、イスラエルがヤハウェの聖性を模倣し命に与ることを目的としていると見る古典的アプローチに対し Nihan は異議を唱える。レビ記12-15章の穢れ規定の結び部分の一般的勧告（15:31）について、Klawans 等が指摘するように、イスラエルがより神に近い地位を得る可能性を強調することが目的ではなく、元来この勧告は、イスラエル（人間）の死すべき状況を思い起こさせるものとして作用していたとの視点の蓋然性を主張する¹⁵⁾。その際 Nihan は、古代ギリシャの同様の禁止について、R. Parker の以下の指摘に言及する。

聖なる場所から、出産、死、そして性を締め出すことにより、ギリシャ人は神と人間の性質を分ける深淵を強調している……子どもの出産のために神殿から追放される時、ギリシャ人は自分の息子が生まれたことにより、やがて子どもが自分にとって代わり、自分は死ぬのだということ、その一方で神々は輝かしい不死性において存続し続けるのだということをおもひ出すかもしれない。¹⁶⁾

12) 病気や不運や虫に刺される等の外的攻撃等、多様な事態が徴候と考えられた (Guichard and Marti, "Purity in Ancient Mesopotamia," 91)。

13) Guichard and Marti, "Purity in Ancient Mesopotamia," 105.

14) Guichard and Marti, "Purity in Ancient Mesopotamia," 107.

15) Nihan, "Forms and Functions," 326-328.

16) Parker, *Miasma*, 66.

ここには、前項の古代メソポタミアにおける、神的世界の清浄性と人間存在に伴う穢れの対照性の認識と共通の視点が窺われる。神のいる場所である聖所に近づくことを禁じる「穢れ」についての原初的認識には、神の不死性・聖性と対照的な人間存在への認識があったことが考えられる。

2.2 「穢れ」概念の展開

上述のように「清浄」と「穢れ」に関する古来の認識が、ヘブライ語聖書の背後の伝統の中にもあったことが考えられる。レビ記1-7章の献げ物の規定と11-15章の様々な場合の穢れの規定は、多くの矛盾や繰り返しを含み、段階的な形成過程を示している¹⁷⁾。Nihanはレビ記1-7章、11-15章の多くの規則が、エルサレムの中央聖所における祭司の家系によって受け継がれてきた祭司的教えの集成にその起源を持つとの見解の蓋然性を支持し¹⁸⁾、レビ記17-27章(神聖法集)の部分は、レビ記の中でより後代の構成の層に属するとの見解に同意している¹⁹⁾。そしてレビ記がエルサレムやサマリアの中央聖所における祭司的実践の教えにそのルーツを持つのであり、古代イスラエルの儀礼的实践からレビ記を分離させようとする試みが間違っただけのものであることを指摘する²⁰⁾。

レビ記の起源についてこのように言及しつつ、Nihanは、「しかし文書の最終形態になると、我々がその機能を単に祭司的な『手引き』、あるいはエルサレムやサマリアの中央聖所における儀礼実践の写しに限定することができないこともまた、同様に明らかである」と述べ、正典としてのレビ記において、犠牲や穢れに関わる教えはもはや本質的に祭司的な知識として提示されているのではなく、「イスラエル」として同定される民族集団に対してシナイ山で現される神の法として提示されている(レビ1:1-2a参照)ことを指摘する²¹⁾。Nihanはレビ記の最終形態が、モーセ五書が成立したと考えられる前5-4世紀のアケメネス朝ペルシアの支配下の「イスラエル」の民族集団の視点を反映しており、最終形態としてのレビ記における物質的穢れと道徳的穢れの規定は、「イスラエル」の社会的集団の統一性を脅かす外的あるいは内的現象に対して社会的コントロールを確立する試みであったと分析する²²⁾。

17) Nihan, "Forms and Functions," 312-313参照。例としてレビ11:8, 24-28などの箇所が、清くない動物の死骸のみが穢れているとしているのに対し、レビ11:39-40はこの原則を四足の家畜にも拡大している点を挙げている(Nihan, "Forms and Functions," 313, n. 4)。

18) 申24:8; エゼ22:26; 44:23; ゼファ3:4; ハガ2:11などの箇所からは、תורהの語の基本的意味の一つが、犠牲を捧げることと穢れの扱いについて祭司たちによって伝えられた教えであるという事実を証言しており、またレビ記11-15章の清浄についての教えも同様の「これは…の教えである(זאת תורת...)」との表現で結ばれ、レビ記1-7章にも類似の定型句が見られると指摘している(Nihan, "Forms and Functions," 313)。

19) Nihan, "Forms and Functions," 313.

20) Nihan, "Forms and Functions," 313-314.

21) Nihan, "Forms and Functions," 314.

22) Nihan, "Forms and Functions," 312-316.

2.3 民族のアイデンティティと「穢れ」

上述の Nihan の指摘に関連して、バビロン捕囚後の第二神殿時代に「穢れ」の概念が、イスラエルの民族共同体の境界付けに用いられたことは、他の研究者たちの指摘からも蓋然性が高いと考えられる。

C. E. Hayes は、旧約聖書の中の穢れ概念に関して、儀礼的穢れと道徳的穢れの概念に加え、第二神殿時代のエズラによる改革のもとで、「系統的穢れ」の概念が新たに形成されたことを指摘する²³⁾。Hayes は、儀礼的穢れも道徳的穢れも、どちらも異邦人に生来的な穢れを想定するものではなかったため、イスラエル人と異邦人の間に確実な境界を引くには、「全く異なる種類の穢れ」を作ることが求められた、と分析する。捕囚後の共同体再建の時期に、いくつかのユダヤ人グループは、そのような穢れを組織化することで、排他的な政策を進め、すべての異民族間婚姻を禁止した。この新しい穢れ概念を Hayes は「系統的穢れ」と呼ぶ²⁴⁾。

M. Grohmann は、「イスラエル捕囚民の国の喪失が、聖書時代のイスラエルにアイデンティティの深刻な危機をもたらした一方で、その捕囚はイスラエル人のアイデンティティの新しい概念を生じさせ」、「一神教、トーラー、安息日、祝福の約束、割礼、聖の規定といった、アイデンティティと、アイデンティティの意味を生み出す象徴の中心的基準は、捕囚と捕囚後の時期に、それらの直接的に関連する決定的局面を経験した」と指摘する²⁵⁾。

Hayes が提唱するように、新しい概念として「系統的穢れ」を位置づけるかどうかについては更なる考察が必要であると考えますが、古来、神の清さと対照的な人間存在の自覚として機能していたと考えられる「穢れ」概念が、捕囚後に民族集団の境界付けのために用いられた状況の前段階として、イスラエルの捕囚の状態が「穢れ」のメタファーと共に理解されたという事態が想定される。

3. 捕囚と「穢れ」のメタファー

3.1 נדה (niddāh) の穢れ

レビ記15章19節では、月経期間中の女性が7日間 נדה の状態にあり、この期間に彼女に触れた者は、夕方まで穢れる (יטמא) と言われている。נדה の状態にある女性が横たわった所の物も、座った所の物も穢れる (יטמא) (20節)²⁶⁾。神の住まい (משכן) を穢して死を招かないよう、イスラエルの人々を彼らの穢れから遠ざけねばならない (31節)。この穢れは、Klawans の分類によると、典型的な儀礼的穢れであり、接触感染と清めの儀礼についての指示を確認することができる。

נדה (niddāh) の語源は不詳であるが、「去る、逃げる、彷徨う」(カル形) や「敗走させる、追い払う」(ヒフィル形) などの意味を持つ נדד に起源を辿る意見や、「追い払う、退ける」(ピ

23) Hayes, *Gentile Impurities*, 26-27.

24) Hayes, *Gentile Impurities*, 26. これは従来指摘されてきた「血統」の聖性の問題ではなく、「系統」の聖性の問題であると指摘される (Hayes, *Gentile Impurities*, 27)。

25) Grohmann, "Purity/Impurity," 103.

26) レビ12:2, 5 には、月経の穢れに準じる出産後の穢れについて記されている。

エル形)の意味を持つ **נדה** に起源を見る意見がある²⁷⁾。月経の女性の場合、元々 **נדה** (niddah) は経血の放出や排出を表し、それが特に月経中の女性の穢れ、あるいは一般に穢れを表すようになったと指摘される²⁸⁾。B. A. Levine は **נדה** (niddah) が、アッカド語の *nadû* (追放する、放棄する) と同起源と考えられる **נדה** に基づいていると指摘し、「放棄すること」が、追い出される月経中の女性に言及しているのか、あるいは女性の体を出る血液の流出に言及しているのかを問う。Levine はヘブライ語の **נדה** (niddah) が元来は単に生理学的作用、あるいは単純に散水や放水に言及していたと指摘し、**נדה** がレビ 6:20 や王下 9:33 では血液について言われている **נדה** (まき散らす) の変形である蓋然性に言及しながら、後者の可能性を示唆しているようである²⁹⁾。

3.2 捕囚と **נדה**

レビ記において、物質的(儀礼的)穢れとして言及されている女性の月経の穢れ **נדה** が、捕囚状態と関連して、イスラエルを表すメタファーとして用いられている例を確認することができる。

『エゼキエル書』36章17節

בן־אדם בית ישראל ישבים עלי־אדמתם ויטמאו אותה בדרכם ובעלילותם כטמאת הַנְּדָה היתה דרכם לפני:

人の子よ、イスラエルの家は自分たちの土地に住んでいたとき、それ(=土地)を自分たちの歩みと行いで穢した。わたしの前で、彼らの歩みは月経の穢れのようなだった。

『哀歌』1章17節

פרשה ציון בידיה אין מנחם לה צוה יהוה ליעקב סביבו צריו היתה ירושלם לַנְּדָה בנייהם:

シオンは両手を広げたが、彼女には慰める者はいない。主は苦しめる者たちに命じ、ヤコブを包囲させた。エルサレムは彼らの間で穢れとなった。

T. M. Lemos は、レビ記12-15章は、性病や皮膚病を程度のより甚だしいものとみなしているにもかかわらず、エゼキエル書と哀歌は、月経を深刻な穢れの象徴と見ていることに注目する³⁰⁾。Grohmann は、「これらのようなテキストは、女性にとって非常に困難な歴史を持っている」と述べる³¹⁾。預言者においては、しばしばイスラエルは女性の姿で形象化され、更に、その女性の姿で形象化されたイスラエルが他国の神々の偶像崇拜に走る姿が、ヤハウエを裏切り他の神々と淫行を行う女性の姿として記されている³²⁾。Lemos はエレ 2:22-23を指摘しつつ、「ここでは、道徳的穢れが偶像崇拜に結び付けられている。Klawans によると、偶像崇拜

27) J. Milgrom, D. P. Wright, and H.-J. Fabry, “נדה,” *TDOT* 9:232-35.

28) Milgrom—Wright, *TDOT* 9:232.

29) Levine, *Numbers 1-20*, 463-464. Levine は、ラシがアッカド語の同語源語が知られる以前に、恐らく既にこの見解を持っていただろうと指摘する。

30) Lemos, “Where There Is Dirt,” 286.

31) Grohmann, “Purity/Impurity,” 114.

32) エレミヤ書 2章、エゼキエル書16章、23章等。イスラエルを淫行を行う女性と重ねた初めはホセアであろうか。

は道徳的穢れにつながる主要な三つの罪の種類の一つである。しかし、儀礼的清めもまた記されている」と述べ、更に、Klawans が道徳的穢れの根拠として挙げているエゼキエル書36章においても、25節でヤハウエが清い水を民に振りかけて彼らを清めていることを指摘し、この箇所にはメタファーの作用を認めないことに疑問を呈している³³⁾。

3.3 メタファーの意義

ここで隠喩論における議論を手掛かりに、メタファーの意義について考えたい。P. リクールは、ギリシアの詭弁哲学から19世紀の修辞学研究までの伝統が前提としていた、隠喩が個々の語の本来の意味の単なる置き換え・逸脱に過ぎないとの認識に異議を唱える。リクールは、隠喩は言述に新しい意味を与えると共に、言語に世界経験の新しい領域を開示する力を持っており、聖書の言語において人間存在の新しい可能性を開示する機能を担っていることを指摘する³⁴⁾。そして隠喩とは「『レッテル』(labels)の貼り換えによって、この貼り換えを拒んでいる新しい対象の外示(Denotation)を拡張することである」と述べる³⁵⁾。以下に、隠喩の創造的機能が、捕囚と穢れのメタファーにおいてどのように作用しているのかを考察したい。

3.4 捕囚と穢れのメタファー

Grohmann は、エゼ36:16-32のテキストが、捕囚後期に位置付けられると指摘しつつ、このテキストにおいて、「儀礼的穢れは道徳的穢れのメタファーとして作用している」と述べる³⁶⁾。すなわち「月経の女性の儀礼的穢れが、エルサレムの道徳的穢れのメタファーとして作用している」のである³⁷⁾。

月経中の女性の姿で形象化されたエルサレムが、エルサレムの道徳的穢れのメタファーとされている背後には、元来、聖所に入ることが相応しくない状態を意味する物質的(儀礼的)穢れであった **הנה** が、聖所に近づくことのできない女性の姿として、道徳的穢れ(罪)の故に捕囚状態となり追放されたイスラエルの姿に重ねられていることが考えられる。しかし、これら

33) Lemos, "Where There Is Dirt," 287-288.

34) リクール「聖書の言語における隠喩の役割と機能」、82-86頁。

35) リクール「聖書の言語における隠喩の役割と機能」、97頁。

36) Grohmann, "Purity/Impurity," 114. Grohmann は、Klawans による儀礼的穢れと道徳的穢れの区別が、穢れと道徳的罪とを混同しないために有益であると評価する一方で、「可能な限り厳密にそれら二つの間の『重なり』を見ることは意味がある」とし、ヘブライ語聖書のテキストが、儀礼的穢れと道徳的穢れに同じ語彙を用いているという点に、Klawans の分類の問題点を指摘する(Grohmann, "Purity/Impurity," 106)。

37) Grohmann, "Purity/Impurity," 118. Grohmann は、哀 1:8-10 について、1:8 の **הנה** を (1)「月経」と読む解釈、(2a)「あざけり」と取る解釈、(2b)「彷徨うこと」とする解釈を紹介し、(2b) を最も説得力があると評価しつつ、三つの解釈それぞれ全てに可能性があることを指摘する(Grohmann, "Purity/Impurity," 117-118)。Grohmann は否定的であるが、(1)の解釈についても、9節において、この女性の衣の裾に彼女の穢れ(**טמאתה**)がついている、という表現を読む時、また 1:17 で月経の穢れがイメージされていると考えられることから、月経との関連が想起される可能性は否定できないのではないだろうか。8節で、彼女(エルサレム)が **הנה** になった、と述べられた後、「彼らは彼女の裸(**ערותה**)を見たのだ」と言われている点も、後に見るように、レビ記18章との関連の可能性が考えられる。

の箇所におけるメタファーの意義は、単に「(聖所から) 追い払われた状態」の類似性だけに留まらない可能性がある。

メタファーの性質として、メタファーによって結び付けられている事柄の類似性の根拠の推察が、読者(聞き手)に委ねられており、そこには多義的な意味の可能性³⁸⁾ということ想起する時、以下の Grohmann の指摘は、説得性のあるものとして受け止めることができるだろう。

Grohmann は、前述の哀歌 1 章 17 節の $\eta\eta$ が「月経の女性」と訳されるべきであるとし、そこには、月経の女性の儀礼的穢れがエルサレムの道徳的穢れのメタファーとして作用している用法を見ることができると指摘する。Grohmann は、哀歌 1 章 17 節はエゼキエル書 36 章 17 節を知っている、あるいは共通の伝統を共有しているように思われると述べ³⁹⁾、この文の背後に儀礼的穢れが想定される場合、このテキストは、月経の女性の儀礼的穢れについて記すレビ記 12 章、15 章を想起させ、その穢れが一時的な状態で、清めの儀礼によって終わらせられるものであるとの概念を、社会的分離の状態に結び付けている、と指摘する⁴⁰⁾。すなわち、これらの箇所において、月経の女性のメタファーは、聖所に近づくことのできない状態の女性と、土地から追放された捕囚の民の状態とを類似性の根拠としているのみでなく、そこから想起されるもう一つの類似性として、その穢れが実際には道徳的穢れであるにもかかわらず一時的な穢れであり、一定の追放期間と清めの儀礼を経て、再び聖なる地に近づくことができるとの認識を導くものとして作用している、と考えられる⁴¹⁾。

先の隠喩論の用語を用いるならば、 $\eta\eta$ の女性のメタファーは、捕囚状態のイスラエルの道徳的穢れの「レッテル (label)」を、儀礼的穢れの「レッテル (label)」に貼り換え、捕囚のイスラエルが再び聖なる地への入場を許されるという意味領域を開くという作用を担っている、と考えられるのである。

3.5 捕囚後の「穢れ」概念への動機付け

以上の考察から、捕囚の期間が終わり、穢れ(罪)を清められて再びその地に帰還したイスラエルが、穢れから遠ざかり、民族の境界付けをしながらイスラエルの新たなアイデンティティ形成を行ったことの前段階として、捕囚の期間を一時的なものと認識させるメタファーが作用していることが考えられる。

聖書において、 $\eta\eta$ の捕囚の比喩としての用例が捕囚以降のテキストで登場する⁴²⁾ことは当然であるが、月経ではなく一般的な穢れの意味で用いられている用例のほとんどが、捕囚後の

38) 野内『レトリックと認識』、80頁。

39) Grohmann は、哀歌の中の(特に 1-2 章の)歌のいくつかは捕囚期に起源を持つが、哀歌の諸編は、捕囚後の議論において更に発展させられていると指摘する (Grohmann, "Purity/Impurity," 114. 更に 115 と n. 58 をも参照)。

40) Grohmann, "Purity/Impurity," 118-119.

41) このことを想定する時、3.2 で指摘されたエゼ 36:25 において、追放されたイスラエルの家を再び自分の土地に導くために、ヤハウェが清い水を振りかけて穢れから清めることが記されていることも、想定されるメタファーの作用の点から理解することができる。

42) エゼ 36:17; 哀 1:17.

テキストであることは注目すべき点であるだろう⁴³⁾。更に、女性の月経を指す場合も、儀礼的穢れとして⁴⁴⁾ではなく、道徳的穢れに関して言及される例⁴⁵⁾が全て捕囚後の視点を経たテキストであることも注目に値するだろう。レビ18:19⁴⁶⁾が含まれる「神聖法集」の年代については議論が分かれる⁴⁷⁾。しかし、最終形態としてのレビ記が、捕囚後の形成であることに変わりはないだろう⁴⁸⁾。

Nihan は、18章の道徳的穢れについての戒めの言葉が、イスラエルに与えられた土地の清浄と関連づけられていることを指摘する⁴⁹⁾。レビ記の文脈は、出エジプト後最初のイスラエルの定住について語っているが(28節)、道徳的穢れが土地からの追放につながることを警告する言葉は、エゼキエル書22章では、バビロン捕囚においてイスラエルの民が諸国民の中に追い払われる理由として語られている(15-16節)。レビ15:24では月経の女性と寝た男性が7日間の儀礼的穢れを受けることが記されていたのであるが、レビ18:19⁵⁰⁾とエゼ22:10⁵¹⁾においては、月経の女性との性的関係が、土地からの追放の原因となる道徳的穢れとして禁じられている。

レビ15:24では女性との性的関係が「寝る(שכב)」という動詞で表されていたのに対し⁵²⁾、レビ18:19では「彼女の裸を露わにする(לגלות ערותה)」という表現が使われている⁵³⁾。そして、イスラエルの民を「聖なる種族(זרע הקדש)」とし(エズ9:2)、異民族との婚姻の禁止・解消について記すエズラ記が預言者たちの言葉として言及するエズ9:11-12は、明らかにレビ記18章をも前提としており、「土地の民の穢れ(נדת עמי הארצות)によって穢された地(ארץ נדה)」と、*נדת*の語によって表現している⁵⁴⁾。先の Hayes の報告のように、このエズラの改革の延長線上に、イスラエルの民を異民族の穢れから遠ざけ境界付ける動きが起こったことが考えられる。

43) レビ20:21; エゼ7:19-20(この箇所も、月経の穢れのメタファーの可能性もある); ゼカ13:1; エズ9:11; 代下29:5; イザ66:5等。例外はアモ6:3のみ。ただし民19:9, 13, 20-21; 31:23の「清めの水(מי נדה)」は現在の考察から除外する。

44) レビ12:2, 5; 15:19-20, 24-26, 33。

45) レビ18:19; エゼ18:6; 22:10。

46) レビ18:19「月経の汚れを持つ女性(אשה בנדת טמאתה)に近づいて、これを犯しては(לגלות ערותה)ならない。」

47) Klawans は、祭司文書(P)と神聖法集(H)の両方の流れが捕囚前の時期に由来すると想定する(Klawans, *Impurity and Sin*, 22)。

48) Nihan, “Forms and Functions,” 312. Nihan, *From Priestly Torah to Pentateuch*, 619をも参照。

49) Nihan, “Forms and Functions,” 339.

50) レビ20:18をも参照。

51) エゼ18:6をも参照。

52) G. Holtz は CD 5:6-7 において動詞 שכב が使われていることに着目し、この箇所がレビ18:19よりもレビ15:24を想起しており、Klawans の議論に反して、このテキストが未だ儀礼的穢れ概念を保持したテキストであると述べる(Holtz, “Purity Conception,” 520-521)。

53) 前述の哀歌1章8節では、女性の姿で形象化されたエルサレムが *נידה* になったことと関連して、「彼らは彼女の裸(ערוותה)を見た」と言われていた。エゼ22:10では、「父の裸を露わにした(ערוותאב גלה)」と言われている。動詞 *גלה* については、元来の意味は「露わにする、覆いを除く」の概念の背後にあり、「移住する、捕囚に行く」は、この動詞の重要な世俗的意味を指すと指摘されている(H.-J. Zobel, “גָּלָה; גּוֹלָה; גּוֹלוֹת; גּוֹלוֹת,” *TDOT* 2:476-88参照)。

54) レビ18:24-30の他に、申7:1-3; 11:8; 23:6; 王下21:16; イザ1:19からの引喩が指摘されている。預言者たちの言葉と言われているが、その多くがモーセ五書からの引用であることが指摘されている(申18:15; 34:10; 王下17:23; 21:10; エレ7:25等をも参照)(Williamson, *Ezra, Nehemiah*, 137)。

4. まとめと展望

本稿では、古代イスラエルにおける「穢れ」概念の変遷を跡付けることを通して、古代オリエントの概念以来、神の清さとの対照において自覚された人間の穢れの概念が、バビロン捕囚の文脈において、イスラエルの道徳的穢れ（罪）が、聖所から一時的に遠ざけられる *הרה* の儀礼的穢れの状態にある女性のメタファーによって表現され、更にこの概念が、捕囚後のイスラエルの民族的共同体において、穢れから自らを遠ざけ「聖なる民」となることへの動機付けとして作用したという経緯を考察した。更にこの「穢れ」概念は、エズラ記において窺われる「聖なる種族」としての民族の境界付けの方向性と共に、やがて「異邦人の穢れ」概念の形成につながっていったことが考えられる。

今後、第二神殿時代における「穢れ」概念の変化⁵⁵⁾を更に考察し、「穢れ」の概念・認識が、キリスト教のアイデンティティ形成に与えた影響を明らかにすることを、これからの課題としたい。

(主要参考文献)

- Botterweck, G. J., and H. Ringgren, eds. *Theological Dictionary of the Old Testament*. Translated by J. T. Willis, G. W. Bromiley, and D. E. Green. 16 vols. Grand Rapids: Eerdmans, 1974–2018.
- Douglas, Mary. *Purity and Danger: An Analysis of the Concepts of Pollution and Taboo*. 1966. Repr., London: Routledge and Kegan Paul, 1978.
- Grohmann, Marianne. “Purity/Impurity: Identity Maker and Boundary Maintenance in Postexilic Discourse.” Pages 103–121 in *Şedaqa and Torah in Postexilic Discourse*. Edited by S. Gillmayr-Bucher and M. Häusl. London: Bloomsbury T & T Clark, 2017.
- Guichard, Michaël, and Lionel Marti. “Purity in Ancient Mesopotamia: The Paleo-Babylonian and Neo-Assyrian Periods.” Pages 47–113 in *Purity and the Forming of Religious Traditions in the Ancient Mediterranean World and Ancient Judaism*. Edited by Christian Frevel and Christophe Nihan. Leiden: Brill, 2013.
- Hayes, Christine E. *Gentile Impurities and Jewish Identities: Intermarriage and Conversion from the Bible to the Talmud*. New York: Oxford University Press, 2002.
- Holtz, Gudrun. “Purity Conception in the Dead Sea Scrolls: ‘Ritual-Physical’ and ‘Moral’ Purity in Diachronic Perspective.” Pages 519–536 in *Purity and the Forming of Religious Traditions in the Ancient Mediterranean World and Ancient Judaism*. Edited by Christian Frevel and Christophe Nihan. Leiden: Brill, 2013.
- Klawans, Jonathan. *Impurity and Sin in Ancient Judaism*. Oxford University Press, 2004.
- Lemos, T. M. “Where There Is Dirt, Is There System? Revisiting Biblical Purity Constructions.” *Journal for the Study of the Old Testament*. Vol. 37.3 (2013): 265–294.
- Levine, Baruch A. *Numbers 1–20*, The Anchor Yale Bible. New Haven: Yale University Press, 1974.
- Neusner, Jacob. *The Idea of Purity in Ancient Judaism*. Eugene: Wipf and Stock Publishers, 1973.
- Nihan, Christophe. *From Priestly Torah to Pentateuch: A Study in the Composition of the Book of Leviticus*. Tübingen: Mohr Siebeck, 2007.
- Nihan, Christophe. “Forms and Functions of Purity in Leviticus.” Pages 311–367 in *Purity and the Forming of Religious Traditions in the Ancient Mediterranean World and Ancient Judaism*. Edited by Christian Frevel and

55) Holtz は死海文書には、道徳的穢れ (moral impurity) というよりも本質的穢れ (constitutional purity) の概念が見られるとして、穢れ概念の変遷に、知恵伝統と祭司の伝統の統合が影響していた可能性を示唆している (Holtz, “Purity Conception,” 529)。

- Christophe Nihan. Leiden: Brill, 2013.
- Parker, Robert. *Miasma; Pollution and Purification in Early Greek Religion*. Oxford: Clarendon Press, 1983 (2001).
- Williamson, H. G. M. *Ezra, Nehemiah*. Vol. 16 of *Word Biblical Commentary*. Grand Rapids: Zondervan, 1985.
- 野内良三『レトリックと認識』日本放送出版協会、2000年。
- 大宮有博「初期ユダヤ研究における清めと汚れ」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第27巻第2号、名古屋学院大学総合研究所、2016年、139-148頁。
- P. リクール「聖書の言語における隠喩の役割と機能」『隠喩論 宗教的言語の解釈学』ヨルダン社、1987年、82-130頁。

(原稿受理日 2020年3月16日)